

平城宮東方官衙地区SK19189 出土の動物遺存体

—第440次

1 はじめに

平城宮東方官衙地区の調査（第440次）で検出した土坑SK19189の堆積土壌を水洗選別したなかに、ウニ類や海産貝類を確認したので報告する。

2 出土遺構の概要

これまでの報告から、動物遺存体が出土した土坑SK19189の概要をまとめておく^{1・2)}。

平城宮東方官衙地区は、第二次大極殿、東区朝堂院、東区朝集殿院の東側に位置する。第440次調査で検出された土坑SK19189は、東西約11m、南北約7mの不整形を呈しており、多量の木簡、削屑、木製品、土器、瓦などが廃棄された深さ約1mの土坑である。下からⅠ：木屑層、Ⅱ：粘性の強い混合層、Ⅲ：礫と粗砂の混合層、Ⅳ：粗砂が堆積していた。Ⅰの木屑層は、大きく3つの単位に分けられ、東側へ2度穴を拡張していたことがあきらかとなった。埋没後には、掘立柱建物SB19175が建てられている。

Ⅰの木屑層からは宝亀2年(771)や宝亀3年(772)の木簡が集中し、上層であるⅢの礫と粗砂の混合層からは宝亀8年(777)の木簡が出土しており、時期は奈良時代後半と考えられる。微化石や木簡の所見から、この廃棄土坑は短期間で埋没した可能性が指摘されている。

出土した木簡の内容は衛府に関わるものが多い。宝亀3年(772)の2月16日には、内堅省や外衛府が廃止され、

その舎人が近衛・中衛・左右兵衛府に分けて配置されており³⁾、こうした衛府の改編にともなう建て替えの際に廃棄された可能性が指摘されている。また、この廃棄土坑には炭を多く含む堆積物が認められ、廃棄後に焼却処理をした痕跡と考えられる。

3 同定・記載

動物遺存体は、Ⅰ：木屑層の堆積土壌を水洗選別した際にみつかったものである。同定は現生標本との比較によりおこない、比較標本には環境考古学研究室と千葉県立中央博物館の所蔵標本を用いた。貝類の同定に関しては、千葉県立中央博物館の黒住耐二氏より多くのご教示をいただいた。

ウニ綱は、殻板の破片が1点出土した。残存長は最大で16.5mmである。棘や口器の骨は認めなかった。

貝類は、巻貝の貝殻片2点と蓋12点が出土した。貝殻片の残存状態は、非常に悪かった。1点は殻頂部である。殻頂の螺塔が直線的ではなく、やや丸みを帯びていることから「クボガイあるいはコシダカガンガラ」と同定した。もう1点は、種が不明だが、巻貝の螺塔片である。蓋12点のうち、石灰質が残存する蓋が1点で、残りは角質のみであった。石灰質が残存する蓋は、小さな棘状が密生しており、サザエの蓋である。角質の蓋は、千葉県立中央博物館所蔵の現生標本を検討した結果、蓋の形態、大きさ、巻の強さが同定に有効な部分であった。出土した蓋は、すべて直径0.5～1cm程度の円形を呈しており、巻の強さで多施型（曲線幅0.3～0.5mm程度）と少旋型（曲線幅1.3～1.5mm程度）に分けられた。多旋型は同心円状の輪紋、少旋型は螺旋状の輪紋がみられる。こうした

表30 SK19189から出土した動物遺存体

遺構・層位	分類群	部位	点数
SK19189 Ⅰ 木屑層	ウニ綱 <i>Echinoidea</i> sp.	殻板	1
	サザエ <i>Turbo cornutus</i>	蓋（石灰質+角質）	1
	クボガイ属あるいはコシダカガンガラ属 <i>Chlorostoma</i> sp.- <i>Omphalius</i> sp.	蓋（角質）	4
	クボガイあるいはコシダカガンガラ <i>Chlorostoma lischkei</i> - <i>Omphalius rusticus</i>	殻頂	1
	スガイ？ <i>Turbo coreensis</i> ？	蓋（角質）	6
	貝類種不明（巻貝）	螺塔片	1
	貝類種不明	蓋（角質）	1

蓋の形態的特徴から、多旋型の蓋は「クボガイ属あるいはコシダカガンガラ属」であり、少旋型の蓋はスガイの可能性が高い（「スガイ？」と記載）と考えられた。スガイには石灰質の蓋もあるが、石灰質の蓋は分解して、角質の蓋のみが残存したものと考えられる。

4 文字資料との比較

平城宮から出土した動物遺存体と文字資料⁴⁾を比較する。ウニ類は「棘甲羸」や「棘甲羸」と記載されていたと考えられ、木簡も平城宮・京で出土している。殻板の破片が出土しており、殻付の状態でウニが運ばれることもあったことがわかる。

サザエは「螺」と記される貝類が該当すると考えられており、『出雲国風土記』では島根郡や秋鹿郡の海で獲れることが記されている。長屋王木簡や二条大路木簡にも認められている。石灰質の蓋が出土したことから、蓋のついた状態で持ち込まれたことが確認できた。

クボガイ、クボガイ属、コシダカガンガラ、コシダカガンガラ属、スガイと同定した分類群は、すべて岩礁域に生息する小型の巻貝である。文献では「シタダミ（細螺など）」と呼ばれる貝類が該当する可能性が高く、平城宮・京で木簡も出土している。殻頂部や蓋が出土してお

り、貝殻ごと持ち込まれる場合もあったことがわかる。

なお、本研究の一部は、科学研究費補助金・若手研究(B)「古代における食生活の復元に関する環境考古学的研究」(課題番号26870928)の成果によるものである。

(山崎 健)

註

- 1) 今井晃樹・神野恵・国武貞克・渡辺晃宏・大林潤「東方官衙地区の調査—第429・440次」『紀要 2009』。
- 2) 今井晃樹「平城宮東方官衙地区SK19189の自然化学分析—第440次」『紀要 2011』。
- 3) 『日本後紀』宝亀3年2月丁卯条。
- 4) 同定した分類群に該当する文字資料の記載については、関根真隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館、1969を参考とした。

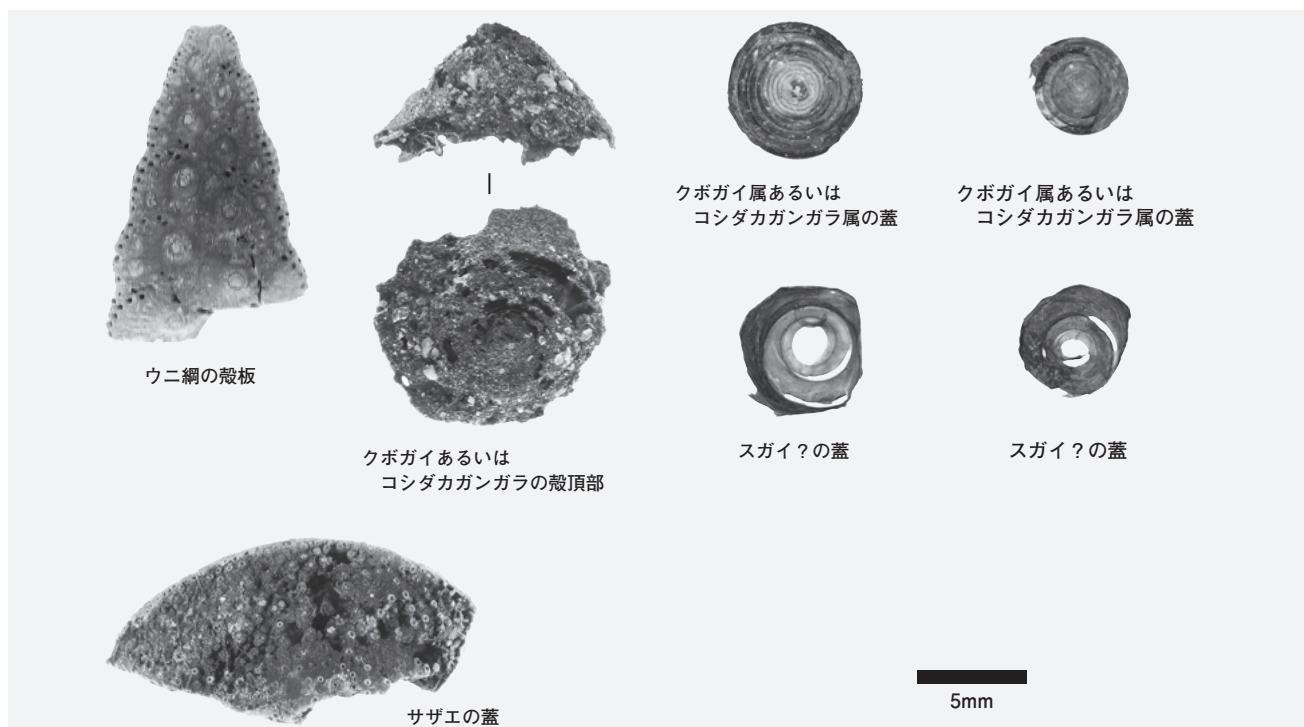


図229 SK19189から出土した動物遺存体